

2025.7.27 香川県教組

子どもに寄り添う実践・記録

竹沢清（元愛知県ろう学校）

I “めんどくささ”の中におもしろさを見つける

経済学部 父・小1で亡くなった 「ノー学校」 「3年のしんぼう」

*長続きの秘訣「人間のめんどくささの中に、おもしろさを見つける」

今日の願い—「ちょうちょ」 川合章「人間にふさわしく」

II「ついてまわり」のまり子

上目づかい 「ついてまわり」 動作のまねをしない 絵が描けない

「男嫌い」（一面の真理）

「好きになれない」→生まれた時880g 98%生きられない（生育歴を知る意味）

・「ついてまわり」 ・伸一（自閉） 俊男（アイアイ）

*幼稚部—行動は共にしていたが、思いは育っていなかった

cf インクルーシブ教育—「ふさわしい集団」「ふさわしい文化・教材」

・動作のまね＝ワンテンポ遅れるから、いっそう動けない

→「意欲」＝共感的な人間関係

→遊具・食缶返し一人で

→テレビ・絵本に反応≒人間関係の弱さ

・プールで思わず踊った

・「弱い子」に働きかけ、働きかける力を身につけていく 例ハンカチ落とし

*幼稚部では笑顔がなかった

・自分を描く→言葉の獲得（大きい 小さい）*発見の喜び

介護員・音楽の先生・俊男のお腹・伸一のボーリング

<言葉獲得の4つの視点>

① 受け止めてくれる人間関係

② 言いたくなるような生活の中身

③ 生活の意識化（隼人の絵日記）

④ 直接的な指導

・会話を楽しむ 伸一の牛乳—ユーモアは生活の幅の証→絵に仲間が

—子どもがわかるとはその子のねがいがわかること

*「事実と事実をつなぐと、(内面の)真実が見えてくる」(＝わかる)

III 私たちが「実践の主体者になる」ための勘所<3つ>

(1) その子像を明らかにする←事例検討によって（他者の力を借りて）

「中心的な課題（勘所）」に焦点を定めて働きかける

（2） 実践を意識化し、言語化し、記録化する＝実践の記録を書く

【その1】 何よりも、その子像を明らかにする—子ども理解

＜事例検討を—他者の力を借りて＞（職場、組合、サークルで→実体験を積む）

・由美— 休み時間 ノートやぶる モノを壊す 花・犬→「人と関わる力」

・ホワイトボード 「見通しとは楽しみのこと」

*「事実と事実をつなぐと、(内面の)真実が見えてくる」

（それぞれが違う事実を見ているからいい）

（「情報を共有する」のではない。「子ども認識を深める」）

*事例検討の醍醐味—「問題行動」から始まり、「中心的な課題」に抜ける

＜子ども理解の原則＞

① “問題行動” を発達要求ととらえる

価値判断はさておき、「なぜ」と問い続ける。

「問題行動」そのものの中に“屈折した形での” その子のねがいがある。（念のため。他に良いところがある、ではない）。

② 私にもそんな思いはなかったか

入室しないとし子（モタモタ、たじろぐ）→（内面が見えるとき待てる）

—共感的理解（弱さがあればあるほど、いっそう人間を深くとらえることができる）

*私たちの人間を見る目の育ちに依拠してか、子どもは見えてこない

*「子ども発見は、私たちの自己否定、自己変革を伴う」 cf 木下順二『巨匠』

【その2】 働きかけ—「中心的な課題（勘所）」を明らかにし、焦点を定めて働きかける

（その子像が明らかになることで、育むべき力が見えてくる）

（1）「中心的な課題」に手厚く

cf 写真「絞り」「シャッター」

（「気になること」を1つ1つ減らす、という発想ではなく）

・里美—「1 + 2、答えちがう」で涙、声は出さない、絵は描かない、給食は遅い

⇒「意欲」＝共感的な人間関係の中で（「挨拶を」—“託されている” 親の願いを読み解く）→「クリスマス会」（子どものための学校）→元気印

・直行—（小5）「1 番でないと…」「9+8→85+69」←「鬼ごっこ」⇔ドリル

「まっ、いいか」→「モノづくり」は自己中心性をそぎ落とす

*花や実に見え隠れするのではなく、幹を育てる発想を *「できるまでの力」を育む

（2）集団と文化に出会わせる

① 文化と出会わせる（「文化を伝える」「文化を手渡す」のではなく）

【今日の動向】

・タブレットでの「朝の健康観察」

・挨拶「語先後礼」（スタンダード）

*教育の事務化＝管理主義（城丸章夫）

【対極にある実践】（「子どもが内面から求める」文化を。子どもからの出発を）

- ・原田（メニュー）←“検索”からは浮かび上がってこない
 - ・「チョーダイ」「兄1 自分2」（「学ぶことは自由を獲得すること」）
 - ・辰夫—“体で” “1人で”しか文化が享受できていない→和太鼓
- <私のハウツー>=心を動かす
- ・俊作のキックベースボール

指導＝「集団と文化の出会い」での抵抗→ハードルを下げる

- ・劇づくり

演じて見せる—指導

日替わり＝ごっこ遊び←くり返して飽きる

「指導とはその気にさせること」（城丸章夫）

② 人格は、集団をくぐり抜けて形成される←斉休校で失われたもの

- ・とし子と明子『友だちができない子』（岩波）
- ・障害児とプール＝三角の関係（教職員の関係づくりにも）

三角の関係＝（自閉の子→人を差し込む 知的な子→モノを差し込む）

*（改めて）能力の発達と人格の形成を統一的に

【その3】実践を意識化し、言語化し、記録化する（まり子の実践は36年前）

【福井実践・由美さんの記録】

前と後を読み比べる（ちがいは？）

*犬←竹内常一（いつか役に立つかと思いつつ）本を読んでおく

「場面記録」を（忘れられない、あの瞬間を）を—どう書くのではなく cf 映画

(1) 「門にしがみつ<健太>

- ①リアル（子ども—教師／実践＝人格と人格の交わり） ②中野光「題は実践者の思想を表す」 cf 卒論 ③俯瞰（臨時教員制度の問題が浮上してくる）

「事実があればイメージがわく。イメージがわけば伝わる」

(2) 「腕にかかる重さ」—「書いてこそ在る」

<補足>

*実践と実践記録

1930年代 抵抗の生活綴り方教師（上田庄三郎ほか）によって

理論＋実際→実践 その記録＝実践記録

「実践記録は教師の生活綴り方」（勝田守一）

*事実の切り取り—（こうなってほしい）その子へのねがいが根底に

いつもとちがう・（あっ）と心が動いた・“変化の兆し”をすくい上げる

・「まっ、いいか」 ・「半ズボン」（勘違い＝選択肢）⇔ 事実とデータを区別する

私は事実・場面を映像的に記憶する

*意味づけを →小さな事実が浮上してくる ⇔「エピソード」を記述するだけでなく

・「白」(コミュとは) ・正男のスケート ・自販機「視覚優位は納得優位」

*事実で書く(書こうとする)→子どもを見る目が育つ

・“多動の” 茂→ボーリング ・“やらんでもいい” 陽一→コスモス かき氷
(「主体性が育った」など言葉だけでいうのではなく、「事実でモノを言う」→子どもを十把ひとからげで見る目から逃れられる)

(3) 私の書き方(「ともかく書いて」ではなくて)

・“苦手” でいい(「事実—ふさわしい記述」を試行錯誤することで、認識が深まる)
・「私は」の主語を書く(その後に、実践者の意図が書かれる。実践にとって意図は大事—そもそも事実の切り取りは“主観的”。「主観で切り取り、客観で詰める」
・(マニアックなく笑) 仮名—俊作と昇太 風華(ふうか)→詠(うた)

<こんな手順で>

心が動いた事実・場面を連絡帳に。

(1日に1つほど。私のメモは多くない。私は、事実・場面を映像的に記憶する)

*「連絡帳は子ども発見の記録(連絡のノートではなく)」(連絡帳—いいことはその日文章で、悪いことは頃合いを見て口頭で) cf 原田メモ →(一定期間の後、連絡帳から抜き出した)事実のメモを一覧表に→口頭で報告→集団で意味づける(づけてもらう)→書いてみる(「話し言葉から書き言葉へ」の手順)→集団で検討

IV 元気で働き続けるために

1年目、やめようとした私

<“固着したまじめ人間” 私> → 仲間と子どもに出会って

・すぐれた教師との出会い ・子どもとの出会いの中で

河崎道夫本—あこがれと支え(人間はいくつからでも変わりうる)

<専門性> ①専門性の根幹—子ども理解 cf 人工内耳

②教職員集団の専門性—1人1人で見れば“弱点”、教職員集団で見れば“持ち味・個性”(原則は1つ、実践は多様)

小さくとも変化が見えるとき、私たちは希望を持ち続けることができる。

「小さな事実の中に、大きな人間的価値」

「実践こそ反撃力」「実践に裏づけられた勇気」

「この子らを世の光に」(糸賀一雄) 「社会への発信」(私たちの責務)

—子どもは発達の実体者 私たちは実践の実体者

<参考文献>

子ども理解—『子どもの真実に出会うとき』

働きかけ—『教育実践は子ども発見』

実践の記録—『子どもが見えてくる実践の記録』(ともに全障研出版 定価 1500 円)